2021年 11月 マナ通信

今月のマナ通信

◎９月の週日の聖書日課　（歴代誌第２、ヤコブの手紙、エズラ記、ペテロの手紙第１）

◎土曜日・日曜日の学び　士師の時代　からの感想です。

ペテロの手紙では、クリスチャンとはどのような存在であるかについて書かれています。

そこでは、クリスチャンは永遠の存在であると云ってます。ローマ人への手紙ではクリスチャンとは生まれかわった者と云ってますが、神に召されたクリスチャンにとっては、同じことを云っているのだと思われます。ペテロは二つの面から語ります。

「ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、 傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。 キリストは、世界の基が据えられる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れてくださいました。」（Ⅰペテロ1:18-20）

「キリストの血」と「金や銀」と対比させています。このキリストの尊い血は、金や銀のように朽ちるものではありません。それは、私たちは、傷も汚れもないキリストの血という永遠の力をもつものによって買い戻されたのです。

次に、私たちが神のことばによって新しく生まれ変わった者であると云ってます。

「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。」（Ⅰペテロ1:23）

ヨハネの福音書の書き出しは、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」を思い出します。

ことばが神であるからみことばは「朽ちない種」と表現され、朽ちる種と対比させています。種は命を生み出しますが、その種や芽生えたものも、いつかは朽ちていきます。しかし、神のことばは生きていて、いつまでも残ります。そして、これこそが私たちの福音、良い知らせとして述べ伝えられたことばであると語ります。

しかし、クリスチャンにはもう1つの側面があります。それは、私たちは寄留者であるということです。天に国籍をもつ者、天に属する者とされながら、なおも地上に置かれている。この地上での生活をどのように過ごすか。

「また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。」（Ⅰペテロ1:17）

私たちの父はすべてをご存じであり、すべての人を公平にさばかれるお方です。これは私たちにとって希望であるとともに、厳粛な事実でもあります。主は私たちを見ておられます。あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。

我々は父のみことばに倣う歩みへと導かれていることを、日々思い起こして生活する必要があります。尊い代価をもって買いとられ、新しく生まれた者として、この限られた地上での旅路を大切に歩みましょう。（９月21日の解説より）（畑中伸之）

神は私たちのうちに住まわせた御霊をねたむほどに慕っておられる。神はさらに豊かな恵みを与えて下さる。神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」（ヤコブ4:5-6）

ですから、私たちは神に従い悪魔に対抗する。そうすれば悪魔は逃げ去ります。悪魔は巧妙で、そして狡猾で私たちに近づいてくる。私たちは謙遜でいることを忘れている。だから、いつもへりくだった者となりスキを見せてはならない。私がまだ聖書を学びだして間もない頃この聖句にひかれました。

「あなたがたの思い煩いを、いっさい神に委ねなさい。神があなた方のことを心配して下さるからです。」（Ⅰペテロ5:7）

このみことばが好きでよくロずさみました。私たちは心配して下さる神様に徹底的に信頼するのです。そうすれば、私たちを強めて下さり、神の栄光へと招いて下さいます。

私たちが強固になると云うよりも、神様が土台を据えて下さり、揺るがないようにして下さったのです。

それぞれの時代に苦難があります。主は私たちを心配して下さるばかりか、苦しみを通して強めて下さると約束してくださっています。いつも、ありがとうございます。（畑中千恵子）

もしだれかが、不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。」（Ⅰペテロ2:19）

〈みことばを味わおう〉から ……「神に喜ばれること」は　直訳で「恵み（キカリス）」ですと、なんとペテロは悲しみに耐えることが恵みだというのです。……また、私たちは「恵み」をどのように捉えているでしょうか、問われます。

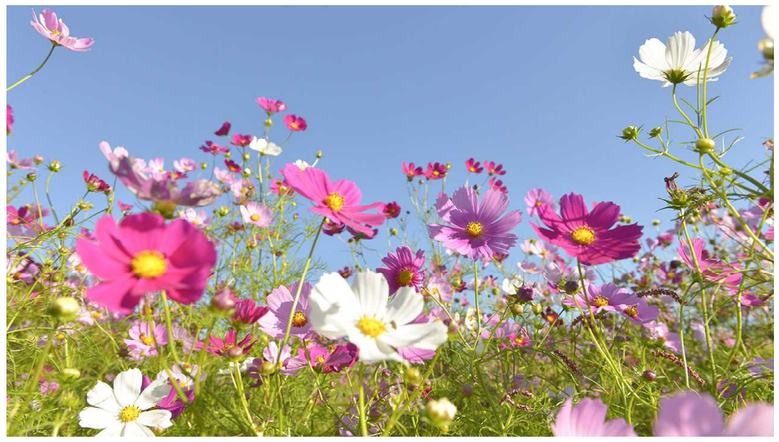
ここでは不当な苦しみを受けてもなお、神の御前における良心、つまり神様に変えられた心のゆえに忍耐するならば、それは恵みであると語られます、と教えられています。

ペテロがイエス・キリストに召されてからの人生を私たちは福音書の中で、多くはお先走りを咎められたり、それが私たちに大切な学びのきっかけになるように用いられた人のようで、とても親しみを覚える存在です。

また復活の主イエスにお会いし、罪赦され、どんなに愛されているか悟らされ、使命まで与えられている人の証し、真実なことばとして、「恵みです」は説得力があります。聖霊のお働きを覚え励まされます。

最近、勲兄弟が必要があって、NTT・KDDI合同聖書研究会のプレートを玄関ドアに取り付けましたところ、嫌がらせがあるようになりました。自分の心が神様の御前に常に義しくあるように祈らされています。これは恵みですと証しできますように。

第2ペテロ3章18節「私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」感謝します。（福島三弥子）



エズラ記を、今まで余り深く読んでこなかったことを、もったいないことをしていたなと、思いました。
　捕囚から帰り、もう一度主の律法に立ち返り、忠実に主の御命令に従って神殿の再建に歩み始めます。まず主の祭壇を築き、生贄をささげ、礼拝をした。それから再建に取り掛かったのですね。
　この順番に、ギクッとしました。正直に白状しますと少し前は、祈って始めるということが少なかったのです。「善は急げ」ではありませんが、早くやるということに集中していました。
　最近は、ことを成し遂げてくださるのは、主であると確信して、祈って始めるのが習慣になりました。
　粗忽者（そこつもの）の私を、長年かけて主はここまで導いて下さいました。主の忍耐と寛容に感謝です。
　「エズラ記8章の言行一致のエズラの態度」主への応答に見習うように、励みたいと思います。
　口で神は全能です、主に信頼します、と言っても、いざというときに、王の軍隊に護衛をしてもらったら証になりません。
　神様以外の何かに頼ろうとしそうなときには、このエズラの記事を思い起こそうと励まされました。（広瀬裕子）

主を信じた時に、それまでの労苦からは解放されて喜んでも、日がたつにつれて、新たな労苦が起こってくるものです。
　それに対して信仰や忍耐で負い続けてゆくこともありましょう。が、驚くべきことに、パウロさんは「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りない」と言い切っているのです。
　今の苦しみをどうとらえたら、このように言えるのでしょうか。
　今回送られてきた「解放される被造世界」「回復される楽園」によれば、今の苦しみをどうとらえたらいいか、ではなく、信者が将来栄化される時言語に絶するほどの栄光にあずかることができ、それを知って、目を留め続け、生きがいにするなら、当然のように今の苦しみ、困難、迫害がとるに足りないものとなり、頭をあげ胸を張っていることができるというのです。
　そうであれば、わたしも将来の栄光を心に焼き付けたくなります。これからは、それを知り、目を留めて続けてゆきます。（高橋美枝）

私の愛する兄弟たち、このことをわきまえていないさい。人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。人の怒りは神の義を実現しないのです。」（**ヤコブ1:19-20**）
　聖霊様の働きによってその機会は激減しているとは思いますが、時々怒りの感情に浸ってしまうことがあります。
　怒りは不安や不満の表れだと思います。なにか心に負荷がかかることが起こった時、まず主に祈ることが大事です。
　私たちは主の恵みによってクリスチャンとなりました。怒るより、神の義を表すことができる存在に変えて頂きました。その機会を無駄にするのではなく、主に喜ばれるようにお取り計らい願いたいです。
　そのためにはみことばを素直に受け入れること、聞いて行うことが大切です。繰り返しこの箇所から学びたいと思います。（永井亮子）

ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」（**ヤコブ1:21**）
　神様が、私の心にみことばを植えつけてくださったことを感謝します。そのみことばを受け

入れるのは、私の側の行為であることを覚えます。
　たましいを救うことができるみことばに、日々、耳を傾けたいと思います。
　そして、みことばを素直に受け入れることができるように、神様に委ね、心を整えていただきたいと願います。（外處トミ）

ないものを　数えるよりも　豊かなる
主のみめぐみを　数えて歩む

2021年9月30日

義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに蒔かれるのです。」（**ヤコブ3:18**）
　主の前に謙遜になり、絶えず主からの知恵をいただくことができるよう、祈り求めていきたいです。平和をつくる者となり、神様が喜んでくださる実を結ぶことができますように。
（外處結実）

あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰った。」（**Ｉペテロ2:25**）
　私たちに常に手を差し伸べてくださっている神様により頼んで歩んでいきたいです。
（外處光歩）

高崎市の「鼻高展望花の丘」のコスモスの写真

善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡にも従うようにと、あなたがたに模範を残された。」（**Ｉペテロ2:20-21**）

キリストはこの世に来られて、この世の誰にも出来ないような多くのあらゆる善を行われました。病で苦しむ人たちを癒し、永遠のいのちへの道を教えられました。しかし、この世の支配者から受けた報いは十字架刑という極刑でした。

キリストは最後まで父なる神様の御心に従い続けて、命をも捨てられたのです。しかし、キリストは「神様に対する従順」を貫かれて父なる神様の右の座に着かれました。

一方、サタンは神様に不従順となって堕落し、この世を支配するようになりました。しかし、やがて永遠の火の池に投げ込まれるのです。

神様は私たちをキリストに似たものとなるように試練をもって訓練を授けておられ、神様の御国に入るための準備をしてくださっています。

その中でこの世での自分の状態に目を向けてしまうと、繰り返し押し寄せる試練の数々に生きていることがつらくなることもありますが、死にまで従われて私たちに模範を残された主イエス様に目を向ける時、慰めと平安が与えられます。

御言葉に従って、主イエス様から目を離さないでいることが大切であることを深く教えられる日々です。（外處徳昭）

私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。兄弟か姉妹に着る物がなく、毎日の食べ物にも事欠いているようなときに、あなたがたのうちのだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言っても、からだに必要な物を与えなければ、何の役に立つでしょう。同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。

しかし、「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。ああ愚かな人よ。あなたは、行いのない信仰が無益なことを知りたいのですか。私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたが見ているとおり、信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことが分かるでしょう。同じように遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので、その行いによって義と認められたではありませんか。からだが霊を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。（**ヤコブ2:14-26**）

この個所は、ヤコブの手紙の中で最も論争の的となっているところです。ルターでさえも、行いによって義と認められるというヤコブの教えと、信仰によって義と認められるというパウロの主張は、相容れない矛盾したものであるとみなしました。

この個所は、「私たちは信仰と行いによって救われる」という間違った教えを裏付けるために悪用されます。つまり、私たちは主イエスを自分の救い主と信じなければならないが、それだけでは不十分だと言うのです。主の贖いのみわざに、私たちの行い－慈善的および献身的行為－も付け加えなければならない、というのです。

私たちは、義認に関する真理を十分に理解するためには、義認に6つの面があることを、はっきり理解しなければなりません。

①私たちは恵みによって義と認められます（**ロマ3:24**）。私たち自身では決して義と認められるに値しない者たちです（**ロマ5:1**）。

②信仰は、神の恵みに対する人間の応答です。信仰によって、私たちは無代価の賜物を受け取ります。信仰とは、神が私たちのためにしてくださったことを自分のものにすることです。

③私たちは血によって義と認められます（**ロマ5:9**）。この場合の血は、私たちの義認を獲得するために支払われる必要があった代価（犠牲）のことです。罪の負債はキリストの尊い血によってすべて支払われ、今や神は、不敬虔な罪人たちを義とお認めになることができます。

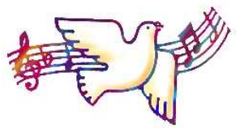
④私たちは神によって義と認められます（**ロマ8:33**）。この真理は、神が義とお認めになるお方であるということです。

⑤さらに、私たちが義と認められることは、キリストを死からよみがえらせた力と関連しています（**ロマ4:25**）。キリストの復活は、神が満足されたことを証明しています。

⑥そして、私たちは行いによって義と認められます（**ヤコブ2:24**）。行いは、私たちの信仰が本物であることを外面的に証明するものです。行いという外面的な表現が加わらないかぎり、いつまでたっても信仰は目に見えないものです。行いによって私たちは、その人が、恵み、信仰、血、神、力、そして行いによって義と認められていることがわかります。これらは決して矛盾してはいません。

これらのことは、同じ真理の異なる様々な面を示しているにすぎません。

①恵みは、神が義とお認めになるときの原則です。
②信仰は、人がそれを受け取るための手段です。
③血は、救い主が支払ってくださらなければならなかった代価です。
④神は、義認における実際の行為者です。
⑤キリストの復活は証拠です。
⑥行いはその結果なのです。



ヤコブは、結果として善い行いを生み出さない信仰は人を救うことができないと主張しているのです。この節を理解する際に、大いに役立つ鍵が二つあります。

第1の鍵は、ヤコブは、14節で「だれかに信仰があっても……何の役に立ちましょうか」とは言っていません。そうではなく、《「だれかが自分には信仰があると言っても……何の役に立ちましょう」》と言っているのです。ヤコブは、口先だけの信仰にすぎない者のことを言っているのです。その人は、自分には信仰があると言っているが、その人の生活にはそれを示すものが何もないと言っているのです。

第2の鍵は、この節の最後の「そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか」という一文の「そのような」ということばです。

言い換えれば、そのような種類の信仰がその人を救うことができるだろうか、ということです。もし「ヤコブが言っているのは、どのような種類の信仰か」と問われたら、その答えはこの節の前半に見いだすことができます。彼は、善い行いという裏付けのない口先だけの信仰について語っているのです。

行いを伴わない口先だけのことばがいかに無益なものであるかが、実例を挙げて、ここで説明されています（**ヤコブ2:15-16**）。

行いの伴わない信仰は、決して本物の信仰ではありません。それは口先だけのものです。

ヤコブは、「私たちは、信仰に行いをつけ加えることによって救われる」と言っているのではありません。それでは、主イエス・キリストが成し遂げられたみわざを侮辱することになってしまいます。

ヤコブが言っているのは、行いは、救いの「根」ではなく、「実」なのです。行いは、原因ではなく、結果なのです。カルバンは、「私たちは信仰によってのみ救われるが、ほかに何も伴わない信仰によって救われるのではない」と簡潔に述べています。

昔も今も、救いは恵みと信仰によります。ヤコブ書を誤解しないにしましょう。（福島勲）

貴重なご感想ありがとうございました。

次回は10月号の感想を11月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。（畑中）